

---

---

REAL WORLD

TomOne

---

PARALLEL ACT

---

---



REAL **WORLD**



# REAL **WORLD**

## もくじ

最初の世界 .....	7
最初のダイブ .....	23
正式プロジェクト .....	55
月面世界 .....	85
あとがき .....	97

イラスト／ヘルニア忍者  
デザイン／TomOne

# 最初の世界

「これもお勧めです！」

「いつもありがとうございます」

古本市前夜のボヤで焼失した祖父の蔵書を、悲しげに見つめる一行瑠璃を励ますために始めた本の推薦。もう二十冊になろうかとしている。

「一行さんの好みとは少し違うかもしれないですけど」

「いえ、どの本も面白いです」

と言ってくれるけれども、無理して言ってくれてるのではないかと不安になる。

「今ここで読んでも良いですか？」

「もちろんです」

机を並べて、二人で読書する。瑠璃は直実が薦めた本を、直実は瑠璃に薦めるための本を。陽が赤みを増して、下校を促すチャイムが鳴った。

「今日はここまでにしましょうか」

「そうですね」

「あの、どうして堅書さんはここまでしてくるんですか？」

真っ直ぐ瑠璃が直実を見つめてくる。瑠璃は人と話す時、目を見てくる。射貫かれそうな鋭



い目で。

「それは……」

「答えは一つだ。だけどそれを言っただけで良いのかはばかれる。いや、それを言うべきなのは今ののだ。」

「一行さんが、好きだからです」

「え……?」

「一行さん！好きです！付き合ってください!!」

「……」

瑠璃はぼかんと口を開けている。

こんな表情の一行さんを見たのは初めてだ。

「わかりました。私も、堅書さんの事が好きですから」

「!?」

直ぐにその言葉を咀嚼そじやくできず、瑠璃の目を見つめると、顔を赤らめて横に逸らした。

ようやく意味を咀嚼し終わり、直実の表情がぱあっと明るくなる。おそらく今までの人生で一番明るくなった。

「堅書さん、これを」

「なんですか？」

「お弁当です」

「えっ!? 僕に!?」

「はい」

「ん~~~~~?」

昼休み、一行瑠璃と勘解由かでのこうじ小路さんの三人でお弁当を食べる。そしたら、瑠璃がお弁当を作  
つて持ってきた。

お弁当を作ってきてくれるなんて恋人みたいだ。いや、昨日から恋人同士になったんだけど。  
「堅書さんにも自分のお弁当がありますから、おかずを少しだけですが」

「ありがとうございます。嬉しいです」

弁当箱を受け取って蓋を開ける。そこにはキンピラゴボウだけがびっしりと詰まっていた。

「……キンピラ沢山」

「お嫌いでしたか？」

少し悲しんでるような、困ったような表情をしてくる。



「その呼び方は止めてください」

「お祝いしなきゃね」

「別にそんな」

「とりあえず、おかず一品あげる」

「……ありがとうございます」

安いお祝いだけど、心の底から祝福してるのは伝わってきた。

## 3

「三鈴さん。相談があるのですが」

「何？ ルリリーヌ」

「その呼び方は止めてください」

瑠璃から話しかけて来るのはとても珍しい。いつもはこちらから、十〇〇くらい話しかけて、ようやくく〇〇返事が返ってくる位なのに。

「それで何かな？」

「恋人とはどのようなことをするものなのでしょう？」

おっとお！ 恋の悩みだった。まさか瑠璃から恋の悩みを相談されるとは。

「この間お弁当作ってたよね」

「他にです」

「もうネタ切れしたの?」

「恥ずかしながら」

「やったの一個だけだよ。一個だけしかネタなかったの?」

「三鈴さんは経験豊富ですよね?」

「うぐっ!」

息を詰まらせたなら、瑠璃が怪訝な顔をしてきた。

どうして経験豊富みたいに思われてるかな? わたしの経験は恋愛小説と少女漫画だけだよ。

「る、瑠璃ちゃん……」

「はい。ようやく普通の呼び方をしてくれましたね」

そこはいいから。心にダメージ受けてそれどころじゃないから。

「わたし、男の人とお付き合いましたことないの」

止めて。信じられないことを聞いたような表情止めて。

「いつも男子に囲まれてるではないですか」

「あんなっちゃうと、むしろ恋からは遠ざかっちゃうんだよ……」

「そう言うものですか」

「そう言うもの」

そもそもわたしは中学まではイモだったのだ。男子に囲まれるなんて高校から。正直まだ慣れてなくて疲れる。

「てっきり毎日違う男子の家にお泊まりするピッチだと思ってました」

「るりりんはわたしの事をそんな風に思ってたの!？」

「冗談です」

「るりりんの冗談はわかりづらいよ……」

真顔で言うんだもん。でも、るりりんが冗談言うなんて初めてかも。

「でも困りました」

「何か?」

「同衾どうきんは付き合っでどれくらいが適切か相談しようと思ってたのですが……」

「ぐふおっ!？」

なんてこと質問しようとしてたの!? と言うか、それ質問するならさっきの冗談だと思っ  
なかつたってことだよね!? 本気だったとしても、そんなやりまくりな人に相談しても全然参  
考にならないよね!

「る、瑠璃ちゃん……」

「はい」

「まずは同衾よりも先にすることがあると思うの」

「例えば？」

「キスとか、デートとか」

「!?」

何その表情。それ『その発想はなかった』な表情だよ。普通はデートやキスが先だからね。わたしも本は好きだけど、るりりんの方がもっと読んでるよね。登場人物は恋人になったらどうしてた？」

「地球を救ったり」

「ん？」

「見つけたお宝で宴会しました」

「偏ってるなあ」

「一番恋人らしいのが、結婚式を挙げて子供を抱いてました」

「るりりんは恋愛物読まないんだね」

「主に冒険小説を。最近は堅書さんに薦められてSFなども」

冒険小説だと恋愛描画なかったり、色々すっ飛ばしても無理ないか。恋愛してても現代日本じゃなかったら参考にならないだろうし。

「じゃあ、お薦めの恋愛小説貸してあげるよ」

「恐れ入ります」

これは堅書君にもアドバイスしておいた方が良さそうだ。

## 4

「一行さん、花火大会行きませんか？」

「花火大会？ 宇治川のですか？」

「そうです。再来週の土曜日にあるそうです」

情報源が三鈴なのは黙っておいた。

「それは、デートのお誘いですか？」

「でっ!? デートっ!?」

そうだ。デートだ。男女で遊びに行くんだから、これはデートだ。

だけど、瑠璃からの問い詰めるような口調に怯む。

ここは押すんだ。僕たちは付き合ってるんだから。

「そうです。デートです」

「わかりました。待ち合わせは何時にしましょう？」

「えっ!?」



「？」

「いえ、すんなりOKしてくれたなど」

「私達は恋人同士です。で、デートは恋人の嗜みです」

そこで瑠璃の頬が赤くなる。瑠璃の恥じらいの症状が可愛らしい。

「そうですね！ じゃあ、六時に京阪の宇治駅で待ち合わせで。先に屋台とか見て回りましょう」

「はい。楽しみにしています」

「……………」

「どうしました？」

「いえ、遅れてすみません」

「私が早く着きすぎただけなので、気にしないでください」

待ち合わせ時間の五分前には着いたので、決して遅れたわけではない。瑠璃がもっと早く着いてただけだ。なのになぜ言い訳じみた事を言ったかというところ、単純に後から来たことを詫げるだけでなく、瑠璃の姿に言葉を失ってしまったことを誤魔化すためだ。なにせそこにいた瑠璃は浴衣姿をしており、学校の制服とは違う新鮮で美しい姿に、直実は思わず見惚れてしま

った。

「どうしました？ 顔が赤いですが、風邪ですか？ 今日を取りやめにしましょうか？」

「こ、これは！ 急いできたのと、夕日。そう、夕日です！」

「そうでしたか。なら良かったです」

「はい。体調はばつちりです。じゃ、じゃあ行きましようか」

「はい」

駅から離れ、宇治川の方に歩いて行く。途中縁日が幾つも出ていて賑わっている。

「沢山ありますね。どこか覗いてみたい所はありますか？」

「そうですね。これをやってみたいです」

「射的？」

「今読んでる本で、銃を扱うシーンがありました」

「なるほど」

射的屋のおじさんにお金を渡してコルク銃をもらう。結果は、直実が小さな景品を一個、瑠璃は全て外した。

「むう」

「気にしないでください。僕のあげますから」

「景品が欲しいわけではありません。もう一度やります」

負けず嫌いなんだな。

瑠璃の意外な面を見た気がした。

「やってやります」

二回目も全て外した。三回目も全て外した。四回目もやろうとした所で、流石に止めた。

「射的がこんなに難しいとは」

「初めてなら仕方ないですよ。ほら、これあげますから、元気出してください」

そう言って買って渡したのはりんご飴。青い浴衣に赤いりんご飴はよく映えた。

他に何件かの屋台を回った後、宇治川のほとりに出る。火花が始まる時間だからだ。

「そろそろですね」

腕時計で確認し、瑠璃に告げる。今はスマートフォンで時間を確認する人が多くて、腕時計を付けている人も減っている。だけれども父の形見の腕時計を直実は愛用していた。時間を確認するだけならスマートフォンより手軽なものもある。

ドン!!

空に大輪の花が咲く。続けざまに幾つも。

「綺麗ですね」

「はい。誘ってくれてありがとうございます」

にこりと瑠璃が笑う。

彼女が笑ったのを直実は初めて見た。とても可愛い笑顔だ。今まで瑠璃は美人系だと思っ  
いたけれども、可愛い系だったと訂正しなければならぬ。

花火のプログラムが終わり、人が帰り始める。直ぐに帰ると混雑に巻き込まれるので、少  
待ってから移動し始める。

そうしたら、空がにわかには曇り始め、ゴロゴロと雷鳴も聞こえた。

流石に急がないと不味い。

「降りそうでね。急ぎましょう」

「はい」

カラカラと下駄の音が響く。朝霧橋の終わりに近づいたと思った時、激しい爆音と、目の前  
が真っ白くなる程の強烈な閃光が二人を襲った。

「う……」

ゆっくりと直実は身体を起こす。暫く気絶していたようだ。身体が痛い。辺りが焦げ臭い。  
何が起こったか思い出そうとする。

「雷？」

もしかして近くに雷が落ちたのだろうか？ ゴルフ場で落雷事故とかはたまにニュースで見  
る。そんな事故が自分に降りかかるとは夢にも思ってた。なかつた。

「一行さん!？」

近くに瑠璃が倒れたままだ。掛けよって抱きかかえる。

「一行さん！」

そのまま瑠璃が目を覚ますことはなかつた。腕時計の針が動かなくなり、時が止まったのと  
同じように。

